

令和元年度「アクティブ・ラーニング推進事業」
小牧市の取組

〔事業概要〕

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、アクティブ・ラーニングの視点から学習過程を質的に改善することが示された。小牧市では“一斉授業からの脱却”を合い言葉に、児童生徒の関わり合いを中心に据えた「学び合う学び」の授業づくりに10年以上取り組んでいる。この「学び合う学び」の取組は、アクティブ・ラーニングの視点と共通する要素が多いと考えている。今では、児童生徒は自然に意見を交流したり、話し合ったりすることができるようになってきているが、その一方で「考えは深まっているのか」「学び合いが形だけになっていないか」等の声が聞かれることもある。そこで、改めて原点に立ち返り「学び合う学び」の本質とは何かを確認する中で、学びそのものの質を高めるには、何が重要でどのような方法があるのかを考える必要がある。また、アクティブ・ラーニングの視点からも改めて「学び合う学び」の授業づくりを見直そうと考えた。

1 研究方針・計画の立案

5月15日 教務主任会 授業改善部会

教務主任会授業改善部会を中心に、授業改善のための研究方針・計画を立案した。今年度の研究テーマは「学びの質を高めるための授業改善」である。学び合う授業を更に進化、発展させ、児童生徒が思考を深める授業を実現するために、各校それぞれの視点に基づいた実践を行い、公開研究会や毎月行われている教務主任会等を通して、研究成果の還元を図っていく計画を立てた。

また、高い見識をもった講師の指導を受けることで、研究の進展を図ることとした。以下は、講師の各校へ訪問記録である。

○学びの共同体 永井勝彦氏	6月13日：光ヶ丘小学校 (13:00～16:00)
	10月2日：岩崎中学校 (10:00～16:30)
	10月3日：光ヶ丘小学校 (13:00～16:00)
○東海国語教育を学ぶ会顧問 石井順治氏	9月6日：小牧原小学校 (13:00～16:00)
	10月18日：小牧原小学校 (10:30～16:00)
	11月22日：小牧原小学校 (10:30～16:00)
○授業と学びの研究所 神戸和敏氏	9月10日：岩崎中学校 (10:30～16:00)
○学びの共同体 木村芳博氏	6月13日：光ヶ丘小学校 (13:00～16:00)
	6月27日：光ヶ丘小学校 (13:00～16:00)
	10月3日：光ヶ丘小学校 (13:00～16:00)

2 各校の実践から

市内各校で計画的に行われている研究推進の取組の中から、それぞれの研究協議会で出された講師からの指導内容例を紹介する。

(1) 小牧市立光ヶ丘小学校

6月27日 校内授業研究 講師 学びの共同体 木村芳博氏

<公開授業>全校

- 算数の平行線のひき方では、教師が説明しすぎずに、児童に考えさせよう、気付かせようと努めていた。国語では、「～のように」と「～のような」の違いについて考えさせていた。そこから深い思考や理解が生まれ、大切なことに気付かせることができていた。
- 児童のやる気を引き出すための、目当ての工夫も見られた。
- 児童が落ち着いていても、課題の質が低いと学びは深まらない。授業はどのように学ぶかが大切である。協同の学びを推進する課題の在り方について研究を深めることが必要。そこでは、子供をよく見ること、教科の特性を考慮すること、提示の工夫をすることが重要である。

<特設授業>1年：国語「聞き方名人になりましょう」

- 話し方・聞き方のポイントを幾つか思い出させ、カードで示した後、グループで発表会をさせた。1年生のこの時期にしては、うまく取り組んでいた。以前よりも聞く力が高まっている。

- ・ 身近な事柄を、主語や述語を入れて順序よく話せていた。今後も発達段階をふまえた指導を心掛けたい。
- ・ 前半は話すことに重点があったが、後半は質問したり感想を伝えたりすることで児童同士の関わりが生まれ、表情が楽しそうになっていった。振り返りの記入に「しつもんをたくさんしてくれて、うれしかった」とあった。1年生であっても関わり合って学ぶ、やる気を引き出す工夫をしていきたい。
- ・ 4人グループで、徐々に対話ができるようになっていった。聞く力が向上してきた証拠である。発表会が単調にならないよう、友人と少し違う話をしよう意識していた。それが程よい難易度になっていた。

(2) 小牧市立小牧原小学校

9月 6日 校内授業研究 講師 東海国語教育を学ぶ会顧問 石井順治氏

<公開授業>全校

- ・ グループに参加できない児童をどうするかが課題である。この際、特別な支援を要する児童がどのように参加しているかは、一つのバロメーターになる。温かな聞き方、やさしい言い方を大切に、対話のある授業づくりを心掛けていきたい。また、間違いや分からなさを大切に授業づくりにも努めていきたい。

<特設授業>4年：道徳「奇跡の生還」

- ・ 児童の様子は、テンションが高くなく、落ち着いている。それが、授業に集中できる素地になっている。
- ・ グループマインドマップを活用するなど、全員参加で学びを深め合うための工夫がなされていた。
- ・ ルールについて考えた導入の5分間は不要ではなかったか。物語に十分出会うことの方が大切であったように思う。
- ・ 課題のレベルが低かったように思う。それでは、うわべだけの授業、きれいごと、教師の押し付けで終わってしまう。
- ・ 対話は「話したい」よりも「聞きたい」を大切にすること。そこから新たな気づきが生まれる。
- ・ 対話で大切なことは、対等に聞き合うこと、自分自身と対話すること、課題と対話すること、そして、自分の考えが変わること（自分の考えを押し通すのではなく）。対話のゴールを決めないこと。
- ・ 教師は、目、耳、心を働かせ、児童をよく見ること（全員を見ること）、そして気付くことが大切である。
- ・ 教師による研究協議会では、丸テーブルを囲んで模造紙に書き込みながら自由に話す、時間を区切ってメンバー交代をしながら話すなど、多くの意見を表出させ交流するための工夫がなされていた。

(3) 小牧市立岩崎中学校

10月2日 公開授業研究会 講師 学びの共同体 永井勝彦氏

<公開授業>全校

- ・ 優しい生徒が多く、皆が学び合っている。
- ・ 生徒同士が聞き合う関係をつくれれば学級は崩れない。

<特設授業>3年：理科「運動とエネルギー」

- ・ 生徒が真剣に考えていた。理由は、まず、課題がよかったこと。「ジャンプの課題」（全ての生徒が夢中になって考えるような難易度をもった課題）になっていた。そして、授業の展開がダイナミックで楽しかったこと。
- ・ 魅力的な導入で、実物を与えたことで意欲を高めることができた。また、ICT機器の活用も効果的だった。
- ・ 教師がやりたいことを我慢し（ゴールを意識せず）、生徒の思考に寄り添っていた。
- ・ 教師に無駄な言葉がないこともよかった。



- ・ 生徒は、ポイントとなる一箇所に着目して、力の関係について考えていた。また、既習事項を手掛かりに解決しようとするなど、価値ある思考を働かせていた。
- ・ 落ち着きが増し、個々の進歩が見られた。1学期に頼杖^{たよりづえ}をして話を聞いていた生徒も成長していた。よい発言をし、振り返りもたくさんかけていた。
- ・ グループ交流を適度に繰り返し、生徒一人一人を主人公にしていた。
- ・ グループ学習は、話し合うよりも聞き合うことを、教え合うことよりも学び合うことを大切にしたい。
- ・ 今後の課題は、分からないのに質問することができない生徒をなくすこと。そのために、教師は生徒同士をつなぐこと。そして、開始から5分以内にグループでの活動を入れること。グループの関わりを一層強めること。問題のレベルを上げ、探求の学びを組織すること（上から引き上げる）。
- ・ 今後必要な力は、創造・探求・協同である。
- ・ 真正の学びによる質の高い学びを実現したい。

3 研究発表会

1月15日 教務・校務研究発表会

教育委員会、教務主任・校務主任を対象に、作成した研究のまとめ（冊子）をもとにした発表会を市内で行った。そして、これをもとにした研究協議を行い「学びの質を高めるための授業改善」について、考えを深める機会とした。また、この冊子は全校に配付され、各校の現職教育で活用されている。

1月28日 愛日教務主任研究発表会

研究の成果を他の市町と交流することで、小牧市の研究をふだんとは違った視点から考える機会とすることができた。

4 研究の状況をホームページに掲載

2月

教務主任会で作成した研究の状況を「Web小牧市教育センター」内に掲載した。

<http://www.komaki-aic.ed.jp/EduCenter/manager/display/>

[事業成果]

児童生徒が能動的に学び合う授業をアクティブ・ラーニングの視点に基づいて、更に進化、発展させることが、「主体的・対話的で深い学び」の実現にもつながる。このことを意識しながら、市内各校で課題が共有され、実践・研究が進められた。

また、講師の指導から、全員が意欲的に協同して学び、理解を確かにするグループの活用法や教師の関わり方について、理解を深めることができた。併せて、学びの質を高める「ジャンプ課題」の設定や授業展開の工夫についても、アイデアと改善を積み重ねることができた。

これらのことを、教務主任会や冊子、公開研究会などで学校間を超えて共有し、各校にもち帰り、研究推進会議や校内現職教育を通して役立てるように努めた。

学びの質を高めるための授業改善を、今後も各校で継続し、市内全校で学び合いながらレベルアップを図っていきたい。

各校で講師の指導を仰ぎながら積み重ね、毎月の教務主任会で情報交換してきた取組の成果を具体的に、以下、①～⑥に示す。

<各学校の取組>

① 「聴く」「話す」「振り返る」について各学年の発達段階を踏まえて（A小学校での取組）

A小学校では、学年の成長段階を踏まえた系統的な目標を設定し、実践を進めている。実践を通して、「私は～だと思えます。○ページの△行目をみると～」や「○○さんの言ったことに似ていて～」など、1年生でも根拠や自分の立場を明らかにしながら相手に伝えるときの話し方ができるようになり、効果的であることが分かった。誰かがページ数を言ったら、他の児童がそのページを開く習慣も身に付いてきている。

② 聴き手に自分の言葉が届いているかどうか相手の表情を見て、確かめながら伝えようとする話し方に焦点を当てて（B小学校の取組）

3年生の実践では、聴き手を意識して話せるようにするため、相手の反応を見ながら質問させた。質問された児童は、書き留めた文に頼ることができないようにしたため、意欲をもち、かつ相手の顔を見て答えようとする姿が増えた。質問をした児童は、相手が書き込みを読んでいるだけの場合と比べ、相手の表情が分かることで、うれしい気持ちになり、更に学習意欲が増した。

③ 一人一人の「学び」を保障し、個々の児童の考えを深められる場にするための手立て（C小学校の取組）

課題に対して、考えがもてなかったり、分からないと言えずに一人で困ったりしている児童が、学習活動に参加できるように授業の展開の中にグループ学習を設定する。更に自分が理解できたことで満足せず、より考えが深まるようにグループ学習を効果的に行うための準備と手立てを講じた。グループ学習の際は、そのよさと必要性を意識させるとともに、一部の児童が説明するだけの学習にならないように、「対話的」な意見交流を促した。また、個々の児童が、学習に向き合い、「深まり」のある「学び合い」を展開した。

社会科の授業で、話し合いのはじめに、一人で課題に向かう時間を設定し、自分の考えをもたせたり、分からない点に気付かせたりした。グループの話し合いでは、自分の考えを話した後に「どう思う」と尋ねることをルールとした。さらに、地図帳やノートを使い、資料をつなげてうまく話し合っているグループを教師が紹介することにより、他のグループに手本を示し、話し合いの質の向上を図った。全体発表では、時折、グループに返し、検討や確認を行わせた。これは、全員が理解し、自分の考えを広げたり、深めたりする上で重要であり、さらなる追求にもつながった。

④ 子供の意欲を引き出す導入と資料提示の方法を考えて（D小学校の取組）

社会の学習で、日本各地域の気候の特徴を考えさせるために、まず日本の六地域の写真をプロジェクタでスクリーンに投影した。日本国内でも地域によって気候が違ふことを理解させた後、『日本のいろいろな地域の気候の特徴を考えよう』と学習課題を提示した。ここで、各グループに資料を渡した。逆から見ると理解しづらい資料については2枚ずつ配付することで、話し合いの途中で資料を動かすことなく集中して取り組ませることができた。また、話し合いが行き詰まったのを確認した場合は、追加の資料を配付することで問題解決に導くようにした。



⑤ グループで行う必要性や学ぶことの目的が児童に感じられるような授業展開を目指して（E小学校の取組）

一人一人が自分の意見や考えをもち、課題について調べたり、考えをグループや全体で出し合いお互いが関わり合ったりする授業にするため、グループで行う必要性や学ぶことの目的が児童に感じられるような授業の展開を図った。

社会の授業では、一人では解決できなかったこともグループや全体での話し合いで解決の糸口が見えてきた。そして、全体で話し合うことにより新たな気付きが生まれたり、疑問が生まれたりした。教師がタイミングよく資料を提示したり、児童の発言をつなげたりすることにより新たな気付きも見られた。「社会的事象の見方・考え方を働かせて物事を見る目」や「文化的、経済的、時代的背景を見る目」、「立場を変えて見る目」を育てていきたい。それを意識しながら指導していくことが大切である。

⑥ 「共有課題・ジャンプの課題」のもつ構造に視点を当てて（G中学校の取組）

本校では、グループで活発に活動する姿が多く見られるようになったが、学力の向上が伴わないという課題も残った。そこで、今年度は、「アクティブな聴き方」と「探究的で深まりのある授業」に焦点を当てて研究を行った。

数学の授業では、「共有課題」、「ジャンプの課題」とも、具体的な数を用いて探究活動ができるような課題にしたために、すべての生徒に学習に取り組ませることができた。また、「ジャンプの課題」を「共有課題」の条件を変えた課題にしたことで、生徒の思考をスムーズにし、数学の面白さを体験させることができた。

[今後の事業計画]

アクティブ・ラーニングの視点を生かしながら、児童生徒の関わり合いを中心に据えた授業づくりを進めてきた。しかし、この能動的で関わり合う学びが“活動あって学びなし”というような形だけのものではならない。新学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」に基づき、「主体的」とは具体的にどのような児童生徒の姿なのか、「対話的」な活動の中で「深い学び」として学びの質が深まっていくことはどんなイメージか、改めて授業の中で、児童生徒の思考や対話に寄り添って描き出すことで、原点に立ち返って取り組んできた。一人一人が、能動的に聴き合い、仲間の考えや教材に^{たいいじ}対峙し、まだ自らの中に生まれていないものと自己内対話すること。これが、新たな世界と出会うことにもつながる。



しかし、このような授業を実現するには、複雑で高い専門性が必要であり、現在も、各小中学校で試行錯誤を重ねながら課題に向かい合っているところである。我々教師自身も、互いの「わからなさ」に寄り添い、対話的に学んでいきたいと願っている。アクティブ・ラーニングの視点による授業改善を、更に実のあるものにするために、今後も、本研究をもとに各校でさらなる^{けんさん}研鑽を積んでいきたい。

授業等アドバイスシート

【小中学校共通】

◆ 学びの質を高めるための授業改善を進めましょう

小牧市では「学び合う学び」の授業づくりに取り組んでいる。学び合う授業を更に進化、発展させ、児童生徒が思考を高める授業を実現することが、「主体的・対話的で深い学び」にもつながる。そこで、市内各校では、次の視点に基づいた実践を行い、公開研究会や毎月行われている教務主任会等を通して、研究成果の還元を図っている。

ア 主体的・対話的に学び合える授業づくり

- 全員が、意欲的に学習活動に参加できるグループ学習の活用
- 仲間と関わり合いながら学ぶことで、お互いの理解を確かに行ける授業の実践

イ 考えを広げたり、深めたりできる授業づくり

- 教材・仲間とつながり合い、関わり合いながら、考えを交流し合える学習課題の設定
- 考えを伝え合い、聴き合うことで思考を深めることができる授業展開の工夫
- 学んだことを進んで活用し、向上を自覚できるような授業展開の工夫

各校の授業改善に向けた取組の中から、2つの実践例を示すこととする。

【実践例1】

一人一人の学びを保障し、個々の児童の考えを深められる場にするための手立て（A小学校）

課題に対して考えがもてなかったり、一人で困ったりしている児童が、学習活動に参加できるようグループ学習を設定したり、児童同士をつなぐ働きかけをしたりする。さらに、一部の児童が説明するだけの学習にならないよう対話的な意見交流を促すなど、より考えが深まるようなグループ学習を効果的に行うための手立てを講じる。

①授業の様子（5年社会科「国土の気候の特色」）

授業では、導入段階で、「気温」「梅雨」「台風」「季節風」など、前時までの学習内容を想起させた。その際、黒板の端に既習事項を書き残しておき、その後の話合いでのヒントにさせた。次に『資料をつなげて、日本各地の気候の分析名人になろう』という目当てを提示した。

4枚の地名が書いてない雨温図（北海道・愛知・新潟・沖縄）を配布し、図の見方を説明した。そして、まず自分で、それぞれがどの県のものかを考えさせた。児童は、雨温図の特徴を読み取りながら、日本地図の4地域に図を置いていった。

次に、4人グループでの話合いを行わせた。困っている児童には、「〇〇君に聞いてごらん」などと、学習に参加できる働きかけをした。そして、根拠にした資料を見せながら、自分の考えを話した後に「どう思う？」と仲間に尋ねることをルールとして確認した。さらに、地図帳やノートを使い、資料を

つなげてうまく話し合えているグループを教師が紹介することにより、他のグループに手本を示し、話し合いの質の向上を図った。

学級全体の話合いでは、北海道と新潟の雨温図の判断に迷い、意見が分かれた。そこで、「意見のどこが違うのか。グループで確認してごらん」と投げかけ、判断理由の違いを明確にした。さらに、「北海道の冬の寒さはどうかな」と尋ねると、一部の児童は、ニュースなどで見た経験などから「とても寒い」と答えたので、「資料を見て、もう一度話し合ってみよう」と再度グループに返した。その結果、どのグループも、気温や降水量の特徴から判断し学ぶことができた。

授業の後半で軽井沢（中央高地）の雨温図を配布し、「なぜ仙台より南にある軽井沢の方が気温が低いのか」という小課題を提示し、東西南北という位置に加え、土地の高低という地形による違いに目を向けさせ、学びを深めさせた。

②考察

話し合いを行う前に一人で課題に向かう時間を設定したことは、多くの児童に自分の考えをもたせたり、分からない点に気付かせたりでき、有効であった。また、グループで「どう思う？」と尋ねるルールを実行させたことで、対話的に思考を深める場にすることができた。全体発表では、必要に応じて複数回、グループに返し、検討や確認を行わせた。これは、全員が理解し、自分の考えを広げたり、深めたりする上で重要であり、さらなる追求のもとにもなる。効果的なグループ学習を行うためには、資料の適切さやタイミングのよい提示とともに、話し合いをつなげる教師の補助発問や問いかけなどが大切である。

【実践例2】

「共有課題・ジャンプの課題」に視点を当てて（B中学校）

児童生徒が夢中になって考えるしかけをし、学ぶ面白さを実感させたい。ここでは、教科書の問題を発展させた「ジャンプの課題」を通して、探究的で深まりのある授業を実現しようとした。

①授業の様子（3年生「展開と因数分解」）

文字式の計算を用いて、数の計算のきまりを見つけたり、そのきまりを説明したりすることがねらいである。ここでは、教科書の問題（共有課題）を解いた後、問題の条件を生徒自身に変えさせ、発展的な問題（ジャンプの課題）に取り組ませることとした。

はじめに、共有課題『連続する2つの自然数の2乗の差は、どんな数になりますか』に個人で取り組みさせた。多くの生徒は、具体的な数をあてはめ順に調べることで、計算のきまりを予想することができた。次に、文字を用いて理由を説明させた。

その後、ジャンプの課題『連続する2つの（ ）の2乗の差は、どんな数になりますか』を提示し、（ ）の中は自分で当てはめて考えるように伝えた上で、グループの隊形で取り組みさせた。生徒の多くは、連続する偶数や奇数について、多くの例からきまりを予想したり、文字を用いてきまりを説明したりし、思考を広げ、学んだことを活用することができた。

②考察

共有課題・ジャンプの課題とも、具体的な数を用いて探究活動ができるようにしたために、すべての生徒に学習に取り組ませることができた。また、ジャンプの課題を、条件を変えた発展的な課題にしたことで、生徒の意欲を引き出し、考えを広げ、数学の面白さを味わわせることができた。